

ハイデガー・フォーラム第17回大会

応募要旨6

(特集：アメリカ哲学)

ハイデガー研究における分析哲学の受容史とその舞台裏

かつてマイケル・ダメットが、「現象学」と「分析哲学」と呼ばれるふたつの流れを「ドナウ川」と「ライン川」に喩えたことはよく知られている。そして現在、しばしば現代哲学において相対立する二大潮流として知られ、ときには「水と油」かのように見られることもある両者にかんしては、それでもそれなりの研究が蓄積されてきていると言える。

たとえばフッサールと分析哲学については、半世紀以上も前からいわゆる「ノエマ論争」というかたちで交流が行われてきており、現代の日本の研究者たちも最近の分析哲学の動向を取りいれつつその交流をつづけているように思われる。他方でハイデガーと分析哲学にかんしては、とりわけヒューバート・ドレイファスとその周辺の論者による研究が有名であるだろう。それによりドレイファスは、アメリカの地にハイデガー研究を根づかせたとも言える。

もちろん—しばしば読解の手捌きに問題が指摘されることもあり—、こうした架橋的な研究にどれほどの価値があるのか、あるいはそもそも可能なのかといったことについては議論が必要となるだろう。とはいえ、たとえそうだとした場合、それなりに蓄積されてきた「現象学」と「分析哲学」の交流を一振り払いのけるべきではないように思われる。そもそも、両者の交流はどのような歴史をもつものなのだろうか。こうした意識のもと本発表が試みるのは、そうした交流の歴史を部分的に概観し、いわばその「舞台裏」とでもいうべきものを明らかにすること、そしてそのうえで、それにたいしてどのようなスタンスをとりうるのかを検討することである。

そのさい本発表が主として焦点を当てるのは、ハイデガー研究における分析哲学受容史の一部であるが、これにかんしてはさしあたり二点ほど注意すべきことがある。まず第一に—一言うまでもないかもしれないが—、本発表ではこの受容史の全体を扱いきることはできないということである。そこで本発表では、とりわけ「指示の問題」という視座から捉えられたかぎりでの受容史に着目することにする。他方で第二に、本発表はハイデガーを中心とするものの、発表者の見るところでは、ハイデガー研究における分析哲学の受容その裏面には、フッサール研究における分析哲学の受容が潜んでおり、それゆえ、当の受容史を検討するうえで両者を切り離して見ることはできないということである。

そうした検討によって本発表は、さしあたり以下の諸点を浮彫にすることを試みるものである。

① とくにアメリカ西海岸でのH・ドレイファスを中心としたハイデガー受容が、おなじく西海岸で起こったダグフィン・フェレスダールを中心とするフッサール研究の影響下にあったというこ

と（実際、ドレイファスの博士論文はフッサールにかんするものであるが、それを審査したのはフェレスダールであった）。発表者の見るところ、アメリカにおけるハイデガー受容を牽引したドレイファスの解釈にたいして、いわゆる「ノエマ論争」の火付け役となったフェレスダールがおおきな影響を与えていたことは看過できない重要性をもつ。フェレスダールとドレイファスが「ダメットの例を借りるならば」、現象学受容史における「ドナウ川」と「ライン川」になっている可能性もあると言えよう。

② 以上を導線として見たとき、「指示の問題」をめぐって「分析哲学」、「フッサール研究」、「ハイデガー研究」において、おおきな議論線の推移が重なりあうこと。つまり、「分析哲学」における「指示の記述説」、「直接指示の理論」、「指示の対象依存性」という大まかな流れが現象学研究にも入りこみ、フッサール研究とハイデガー研究の双方にあらわれているということである。この動向は、ハイデガー（ないしフッサール）研究における分析哲学の受容ということで見ればある意味で当然ではあるが、それでもその受容史を整理するうえで有益な枠組みを与えてくれることになるだろう。